

吹き荒れる言論への暴力

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

1928(昭和三)年2月20日、普通選挙法による第一回目の総選挙が行われた。国民にとって待望久しい普選法だったが、政府は徹底した選挙干渉、弾圧を加えた。それにもかかわらず無産政党から計8人が当選、政府に衝撃を与えた。

普通選挙法は治安維持法を抱き合わせで実施されており、政府は3月15日に全国の共産党、労農党、無産青年同盟の関係者千数百人を治安維持法によって検挙し、激しい弾圧を加えた。いわゆる“3・15事件”である。

さらに6月、政府は治安維持法を改悪強化、全国に特高警察が拡大され、思想取り締まりが一段と強化された。

1・記者暴行事件の背景

一方、中国に対しては4月に第2次山東出兵を行い、6月には『満州某重大事件』といわれた河本大作関東軍参謀による張作霖爆殺事件が起き、中国への侵略が激しく展開された。こうした背景のなかで、記者暴行事件が起こった。

4月29日。当時の天長節の日である。メーデーを2日後にひかえて、この日午後6時40分から、無産党合同の内閣打倒民衆大会が本所公会堂で開かれた。

開催前から警官は殺気立っていた。

会場が満員なのを口実に、原宿署員数十人が公会堂前三方を囲んで交通をしゃ断した。警戒線内に住む住民は風呂帰りの人でさえ追い返した。

通してほしいと願い出た住民を有無を言わず乱打し、腕をねじ上げ、蹴飛ばし、血みどろになって倒れる者が続出した。



< 田中義一首相 >

酒気を帯びた警官が多かった。

取材に来た各社の記者、カメラマンに容赦なく鉄拳の雨がふり、カメラはこわされ、フィルムが抜かれた。記者十数人が負傷した。『読売』の記者3人がひん死の重傷を負った。そのうちの1人の話では 車で取材に行き、警戒網に引っかかった。

「右へ曲れ」と言うが、そうすると会場へ行けない。警官と交渉していると、警官からいきなり突き飛ばされ「新聞社も糞もあるものか」と十数人の警官によって袋だたきにあった。急を聞いて、玉虫孝五郎社会部長らがかけつけた。

酒を飲んで赤い顔の警官が多く、記者の1人が「ご機嫌ですね」と言った途端に、無茶苦茶に殴られ、血まみれとなったまま3～40メートルも引きずられた。

その現場には有田宗義原庭署長もいたが見ぬふりで、全く止めなかった。『東京日日』写真部員ら三人も同じように暴行を受けて負傷、さらに日比谷記者倶楽部から代表9人が急を聞いてかけつけたが、これまた、よってたかって殴る蹴るの暴行を受けた。

各新聞社の怒りは頂点に達した。5月1日には貴族院本会議で取り上げられ、19社の連盟で共同宣言が発せられた。

2・寄った警察官から記者は袋叩き

「警官の暴行は計画的に報道の自由を弾圧したるものにして、法治国において有るべからざる暴挙なりと認む。政府はすべからくこれが責任を明らかにし、将来断じて此の非違を再びせざるの誠意を披瀝すべし。なお近時、頻りに記事差し止めを濫用し言論報道の職能を奪うの暴挙に対し、この機会において厳に政府の反省を促す」

各社の社説は激烈な調子で警察の暴力を糾弾した。いずれも1日付で『東京朝日』は「この警察の暴行を如何」、『東京日日』は「警官の犯罪と内閣の運命」などである。

「かくのごとく署長以下一隊の警察官が、意識的に良民に暴力を加うるに至っては警察あれども警察なきに等しいどころか、今後人民は盗賊と共に警察官の襲撃迫害に、みずから身を衛らねばならぬを感ずるのである。今回の事件は一署長の計画的行為にあらず全警察官憲の計画的行為、否、政府の計画的ならざるやを疑うのである」(『東京朝日』)

3・・・警察の暴力や田中義一政権の姿勢をきびしく追及

この時期には、未だ暴力に屈しないペンの抵抗が激しく息づいていた。

連日、各紙はペンを揃えて、一斉の放列を敷き、警察の暴力や田中義一政権の姿勢をきびしく追及した。社会面でも大きなスペースをさいて報道した。

負傷した読売記者らは1日に有田署長らを不法逮捕凌虐罪で告発した。警察の失態は誰の目にも明らかなので、警察当局は3日付で有田署長の佐賀県への転出、免職3人(いずれも巡査)、転勤10人(同)という処分を行った。



<田中義一内閣のメンバー>

この処分は一見、有田署長は左遷という形をとりながら実際は栄転であったため、新聞はいっそう怒り、きびしく追及した。処分された巡

査の1人は「有田署長は警戒に赴く際、思想国難の際だから徹底的に取締れと訓示し、本所表町の酒店から寄せ酒を飲ませた上、金一封をくれました」(『読売』社会面五日)と暴行の内幕を暴露した。

結局、有田署長は検事局で基礎猶予処分になり、6月13日に依願免職となった。以上が記者暴行事件の概要だが、これが暴力とテロによる言論弾圧のいわば幕開けを告げる事件となった。

以後、新聞社や新聞人への暴力の嵐が吹き荒れてくる。

4・・・ここで新聞と暴力の歴史をふり返ってみよう

明治以来、言論の自由は権力、暴力との絶えざる戦いの歴史であった。明治の新聞は藩閥政権と激しく戦ったが、大正、昭和は権力をバックにした暴力が言論を威圧し、これとの戦いとなった。

1918(大正七)年の米騒動の頃から、国粹運動が新聞をターゲットにし、暴力をふるい、愛国や尊皇を売りものに新聞を脅し、金をせびる傾向が出始めた。新聞の側でも弱味をにぎられると金で解決し、逆にそのような連中を使ってライバル紙の攻撃に

利用する者まで現われた。

新聞への暴力がいっそうエスカレートしていくのは普通選挙法をめぐって、各新聞社が賛成に回った段階で、政友会を支持する国粋会や右翼団体は新聞社に一齐に攻撃をかけた。

警視庁はこれらを黙認して知らん顔をきめこんだため、新聞は暴力の前に無防備となった。警察公認のもとに、新聞への脅迫や暴行が加えられたのである。

5・田中義一内閣下で“新聞恐怖時代”

こうした“新聞恐怖時代”は昭和2年から四年頃が一番ひどく、田中義一内閣で鈴木喜三郎内相、山岡警保局長、宮田警視總監のトリオの時であった。

これ以後、軍部が勢力を伸ばし始めると、内務省から陸軍の威を借り、憲兵隊と右翼、暴力団体は結託する。

「憲兵は警察より単純に、彼等を利用するつもりで利用された。荒木貞夫が陸相、柳川平助が次官の頃は秦真次が憲兵司令官となってその傍若無人ぶりは極に達し、憲兵司令部は暴力団の本部となり、部内部外に対する怪文書は大体この中で印刷されて居った。

新聞の自由を守るどころか、新聞の自由を奪い、これを圧殺する暴力がここを本拠として暴威を揮った(1)」

もともと自由主義の伝統を持つ『朝日』、特に『大阪朝日』に対してはシベリア出兵反対、白虹事件(1918年)などで政友会やこれと気脈を通ずる右翼の反感が根強く、攻撃や暴力は何度も繰り返されていた。

1918(大正七)年9月28日、村山龍平社長が右翼の暴漢数人に襲われた。白虹事件などに刺激された右翼の仕わざであった。

1924(同十三)年11月13日には「虎ノ門事件」の犯人、難波大助に関する記事に右翼がいいがかりをつけて、帝国ホテルに滞在中の村山長拳取締役夫妻に面会を強要、村山と一緒に政治部長の緒方竹虎が会うと、暴漢はいきなり、コンクリートの破片で緒方をなぐり、緒方は重傷を負った。

こうした暴力事件がひんぴんと続いた。

1928年3月8日、天皇の第二皇女久宮祐子内親王が亡くなった。

この時、『大阪朝日』の最終版の記事で誤植があった。「久宮様(死)去につき天機並に皇后宮の御機嫌奉伺のため宮中に参殿したものは八日正午までに500名に上った」という記事の「久宮様」のすぐ後に誤って「並に皇后宮」の5字が組み入れ、皇后まで一緒に亡くなったという内容になってしまった。

6・皇室誤報で暴力、テロ

すぐミスに気づいた『大阪朝日』は配達ずみのところは再び配り直し、即刻、宮内省に陳謝するとともに、関係者を処分し、紙面に謹告した。しかし、おさまらなかつた。

納入新聞をみた特高の検閲係は見のがすはずがなく、即座に警察部長に連絡、当時の大阪府知事の田辺治通にも情報が入った。田辺はちょうど南地の料亭で政友会の代議士と酒宴の最中だった。

『朝日』は軍縮問題や普通選挙の論調で政友会と真正面から衝突しており、田辺は『朝日』を目のかたきにしていた。

田辺は「これで朝日をつぶしてやる」と歓声を上げ、暴力団に急使を出し、行動が終わるまで警官を出動させないこと、憲兵隊にも出動しないように要請することなど密議した、という(2)。

一行は「国賊朝日新聞打倒！」のタレ幕など作り、車に分乗して『朝日』に乗り込み、守衛の制止するのも聞かず、仕込杖、木剣、竹ザオ、ステッキなどふり回して、編集局へ乱入、「逆賊！」「逆賊！」と叫びながら窓ガラスやシャンデリアをこわすなど、乱暴を働いた。

同月19日には『東京朝日』にも騒動は波及、ピストルを持った暴漢らが乱入、守衛2人を傷つけ、輪転機に金剛砂をふりまいた。このあと、しばらくして、村山社長宅の玄関へも爆弾が投げ込まれるという事件が起きた。これは幸い不発に終わった。

4月9日には護国会という右翼団体が主催して、芝公園で「祖国擁護国民大会」が開かれ、散会后、群衆は『東京朝日』を襲撃しようとしたが、警官の大動員によってストップされた。

これとあい前後して朝日新聞ようちよう 懲連盟なる組織がつくれ、『朝日』の不買、広告

不掲載運動が一斉に始まったのである。狙われたのは『朝日』だけではなく。このほかにも次々に各新聞社が攻撃され、暴力とテロに慄いた。

3月27日 『福島毎日』が暴漢数人によって襲われ、工場や電話機などが破壊された。

3月29日 『東京毎夕新聞』の木村政次郎社長宅へ暴力団が乱入し、同社長を襲った。

6月28日 右翼「国心会」の自動車三台に分乗した壮漢十数人が『東京日日』本社前で「非国民本山彦一社長を膺懲せよ」とのビラをまき、メガホンで怒号、警官がかけつけると逃走した。

こうした暴力やテロの高まりに対して、新聞の反権力姿勢に反感をもっていた田中義一内閣は特に冷淡であった。警視庁に警備や警戒を依頼しても、十分行ってくれない。検挙した右翼や暴漢もすぐ釈放され、再び新聞社を攻撃して、手を焼くという状態が続いた。

自然と新聞社も自衛策を講じ、暴漢から身を守るために護身用の木刀、ステッキなどを編集局内に備えるところも増えた。

7・・・新聞社も策護身用の木刀、ステッキなどで自衛

緒方も中野正剛から護身用にと贈られた日本刀を社内に備えつけ、社を離れて活動する時は盟友の大西斎に預け、万一の場合はいつでも鯉口を切ってくれるように依頼していた。

また、大西自身も大陸の特派員時代に入手した旧式の拳銃を護身用に携えて、出社していた。

1934(昭和九)年4月26日、日本刀を持って暴漢が『東京朝日』の編集局に乱入、一人を斬りつけた。鈴木文史朗編集総務がイスを持って暴漢に立ち向かい格闘になり、鈴木は背中を大きく斬られ、4人が負傷した。

犯人は二週間ほど前、社会面で報じられた恐喝事件に関係した右翼暴力団の組員で、記事をうらんでの凶行だった。こうした暴力やテロに対して、新聞はなすすべもなかった。

『東京日日』で社会部長をつとめた阿部真之助はにがにがしい当時の思い出を次のように書いている。

「一体皇室記事の報道ほど、新聞および記者にとり、ニガ手はなかった。一点一画でも誤植や誤報があると、どこからか暴力団がやってきて、新聞社を脅迫した。私は数年間、毎日新聞では社会部長を勤めていたが、何にもましていとわしい、イヤな仕事は彼等と対談し、事件の始末をつけることだった。オドシとはたかをくくっていても、ピストルや短刀を目の前につきつけられての交渉である。いい心持がするはずがなかった。時によると、全身が冷汗でビしょ濡れになるようなこともあった」

「あるいは暴力恐かつ者を警察につき出せば簡単に片付くと思える人があるかも知れない。しかし、愛国兼暴力業者に対しては警察は全く無力だった。新聞は無警察の状態において、みずからを守らねばならなかったのである。

」

しかし、新聞は現在でもそうだが、暴力に対抗する暴力を持たないのだ。……こんなに新聞が苦勞したのは、打ち開けたところ皇室尊敬というよりも、暴力を恐れたればこそであった(3)」

(つづく)

<引用資料>

- (1) 御手洗辰雄 『新聞太平記』 鱒書房 1952年10月刊 116頁
- (2) 加藤康司 『校正おそるべし』 有紀書房 1959年9月刊 60 - 63頁
- (3) 大宅壮一他編 『阿部真之助選集』 「昭和という名の元号」 毎日新聞社 1964年8月 252頁

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~maesaka/maesaka.html>